

学位論文審査の要旨

学位申請者	趙 美子 比較社会文化学専攻2019年度生		論文題目	風流たる濁世の佳公子 一詩に見える曹丕と曹植一
審査委員	主 査:	和田 英信 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	戸川 貴行 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	松岡 智之 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	伊藤 さとみ 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	富 嘉吟 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Chinese Literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、後漢末から魏の建国期、魏の実質的創業者である曹操の長子で後に魏・文帝となった曹丕とその弟曹植の不仲説に異議を唱え、二人のあいだには兄弟の細やかな情愛の存したこと、そしてこの視点から当時を代表する文学者でもあった両者の詩文を新たに読み直すことを提案する（論文タイトルは清の文学者王士禛が曹丕・曹植兄弟の並び立つ才気を称えた詩句による）。本論文は序論・結論と、本論の四つの章から成る。

第一章「曹丕と曹植に関する記載」では、二人の作品ならびに『三国志』とその裴松之注ほか諸資料を深く読み込み、さらには先行研究を広く取りあげたうえ、従来の不仲説が根拠に乏しく、むしろ二人のあいだには情誼のこもった交流があったことを述べる。後漢末の建安期においては折々に作品のやりとりが見られたこと、そして曹丕即位後は、公的文章の作成依頼とそれに応えたものにかたちを変えつつ文章の交換が続いたことを指摘する。建安後期の後継者争いをめぐっては、とくに曹丕即位後（延康年間）、曹植を擁立しようとした丁儀らを曹丕が族滅したことが二人の関係に影を落としたことを確認するが、そもそも二人が後継者の地位を争ったという事実はなく、兄は後継者としての自覚のもと自重し、弟は後継争いには無関心であったという。魏建国後の黄初年間、曹植はしばしば有司の告発をうけ罪に問われたが、これを曹丕の意に出るものとする説に対して本論文はこれを否定し、むしろ曹丕は曹植をかばい処罰を軽くしようとしていたとする。また曹植がしばしば転封されたことについても、当時の歴史的背景を詳細に示し、そこに曹植に対するむしろ温かな配慮が備わっていたことを述べる。

第二章「公宴詩—建安年間の遊び—」では、建安期のうたげの詩を丁寧読み込むことによって、諸作品の制作時期を考察し、建安詩および後の文学において一定の位置をしめる公宴の作の制作状況や、そこに読み取られる曹丕・曹植兄弟の関係を明らかにする。

第三章「閨怨詩—黄初年間の怨みと思ひ—」では、夫や恋人と遠く離れた女性の思いをうたう思夫詩、男に捨てられた女性の嘆きや怨みをうたう棄婦詩をとりあげ、そこに仮託された曹植の思ひ、二人の関係性を考究する。本論文は詩の制作時期とその背景を示しつつ、相手の裏切りによる別れをうたう棄婦詩よりも、やむを得ない別れをうたう思夫詩こそが黄初年間における曹植と曹丕の関係を映し出すものであるという。

第四章「遊仙詩—太和年間の偲び—」では、神仙世界を描くことを主題とする遊仙詩をとりあげる。本論文は曹植の神仙に対する態度には時期による変化がみられること（前期においては神仙に対する不信が公言されるが、後には神仙世界への傾倒がうかがわれる）、とくにその契機として曹丕の死があったことを指摘する。曹植詩にしばしば鼎湖の故事（神話上の黄帝が龍にのって遷去した際、地上にとりのこされた臣下が嘆き悲しんだ）を用いたこと、そこには兄曹丕の死によってこの世にとりのこされた曹植自身の嘆きが投影されていると指摘する。

審査委員会は12月20日、2月11日（書面）、2月16日に開かれた。審査の際には、曹丕・曹植の作品のほか、基本的資料、幅広い先行研究に目を通して点、それに基づいて曹丕・曹植の関係に関して全面的な考察が行われている点、そして独自の見解が提示されている点が評価された。一方、歴史事象の背景については基本的情報を分かりやすく提示すべきこと、作品の解釈などについては推測・判断の介在を免れがたいため、歴史事象と作品解釈について明確に分離すべきこと、論旨を補強するためにも基本資料の背景に関する近年の知見を援用すべきこと、そして本論文全体としての目的をどこに置くのかを明示すべきことが求められた。

申請者はそれらに対応して修正を加えた。また、2月16日の公開発表において、論文の内容を分かりやすく説明し、聴衆の質問に回答した。引き続き行われた最終試験において、学位にふさわしい学力を有することが確かめられた。以上に基いて、本論文が博士（人文科学）、Ph. D. in Chinese Literatureにふさわしいものと、委員会として判断する。